



2022年11月 第20巻 第11号

今月の目次

### かく語りき—聖人の言葉

ときどき一人で暮らし、神の御名をと  
なえ、彼の栄光をうたい、そして実在  
と非実在とを識別する—これらが神を  
見るために用いられる方法だ。

…シュリー・ラーマクリシュナ

私は、良い人のお母さんですし、悪い  
人のお母さんでもあります。恐れるこ  
とはありません。辛いときにはいつで  
も、私にはお母さんがいる、と言いつ  
聞かせなさい。

…ホーリー・マザー・シュリー・サー  
ラダー・デーヴィー

怒りや憎悪などのさまざまな激情に屈  
する人は仕事ができない。その人はた  
だ自らをずたずたに砕くだけで、実際  
は何もしない。最も多くの仕事をする  
のは、穏やかで寛容で安定しているバ  
ランスの取れた心である。

…スワミー・ヴィヴェーカーナンダ

- ・かく語りき—聖人の言葉
- ・お知らせ
- ・2022年12月、2023年1月の生誕日
- ・アンジャリ誌掲載のスワミー・メ  
ーダサーナンダに対するインタビュー  
の抜粋 パート2
- ・忘れられない物語
- ・今月の思想

### これからの予定

2022年12月、2023年1月の生誕日

- 12月の生誕日
- スワミー・プレーマーナンダ  
12月1日(木)
- シュリー・サーラダー・デーヴィー  
12月15日(木)
- スワミー・シヴァーナンダ  
12月19日(月)
- クリスマス・イヴ  
12月24日(土)
- スワミー・サーラダーナンダ  
12月28日(水)

2023年1月

スワミー・トゥリーヤーナンダ

1月5日（木）

スワミー・ヴィヴェーカーナンダ

1月14日（土）

スワミー・ブラフマーナンダ

1月23日（月）

スワミー・トリグナティターナンダ

1月25日（水）

### お知らせ

プログラム参加を希望される方はご連絡ください。マスク着用、ソーシャルディスタンス等ご協力をお願いいたします。

・日本ヴェーダーンタ協会の行事予定はホームページをご確認ください。

<https://www.vedantajp.com/>

-----  
10月の英語版ニュースレターに掲載されている‘Fulfilment in life’（充実した人生）という記事の日本語版は諸事情のため、来月以降の掲載になります。  
-----

**『日本のために何かをしたい』というスワミー・ヴィヴェーカーナンダの願いを叶える」 パート2**

*The Bengali Association of Tokyo in*

*Japan* (ベンガル人協会) 出版の『アンジャリ』誌に掲載されたスワミー・メーダサーナンダへのインタビューの抜粋。

### ガウタム

マハーラージ、ありがとうございます。さて、読者の皆さんは、日本ヴェーダーンタ協会が発足した時期や経緯を知りたいのではないのでしょうか。当初は名前も今とは別の名前だったのではありませんか。始まりはどのようなものだったのですか？

### マハーラージ

実際、一定の在日インド人や日本人の学者はスワミー・ヴィヴェーカーナンダについて、いくらかの知識はあったし、先ほど申し上げたように、岡倉天心はインドに渡航しました。ですから、彼や他のつながりを通して、人々はシュリー・ラーマクリシュナ、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ、そしてラーマクリシュナ・ミッションについて知っていました。また、研究のためにインドに旅し、最終的にコルカタ大学でパーリ語の講師になった木村教授という人物もいました。[一] コルカタ滞在中、彼はベルル・マトを訪れ、シュリー・ラーマクリシュナとスワミー・ヴィヴェーカーナンダについての知識を身につけ、後に日本に戻りました。つまり、シュリー・ラーマクリシュナとスワミー・ヴィヴェーカー

ナンダについて知っていた日本の知識人が確かにいたということです。

国際的に有名な講演者で、ラーマクリシュナ僧団の僧侶であり後に僧団長を務めたスワミー・ランガナターナンダは、外国でインドの文化と文明に関する講演を行うために、インド政府後援の文化大使となりました。ランガナターナンダジは日本を含む東アジアのさまざまな地域で数多くの講演をしました。いくつかの主要な日本の大学でも多くの講演をしたのです。1958年にインド大使館で講演が行われた時に、シュリー・ラーマクリシュナ、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ、そしてヴェーダーンタの教えを広めるための組織を設立するというアイデアを初めて提案しました。ランガナターナンダジのインスピレーションの下、ラーマクリシュナ・ミッションと比較的良好な関係にあった木村教授と中村一教授(インドに関する日本を代表する学者)、スミトラ・ラオ氏(退役軍人で同盟軍のメンバー)、そして講演会に参加した日印の有志がこのことに興味を持ったのです。ついに協会は民間団体として、会長・木村教授、副会長・中村一教授、幹事・スミトラ・ラオ氏で、東京に設立されました。この協会は当初、東京ラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ協会と名付けられました。現在ラーマクリシュナ・ミッションのアメリカのセンター長で、著名な僧侶で学

者でもあるスワミー・ニキラナンダが1959年にインド大使館で協会を発足しました。こうして協会は私的な団体としてスタートしました。協会は信者によって運営されていたため多くの制約があったにもかかわらず、会報を発行したり、学校の教室を借りて定期的に会議を行ったりするなど、民間のグループとしてうまく運営することができていました。信者らは、講演のためにインドから僧侶を招待することもありました。そのようなことが数年間続き、ついに1974年に逗子に最初の建物を取得しました。それが協会が所有する最初の家であり、香港に拠点を置く海運会社のオーナーであるチェラム氏が建物建設のための全額を寄付しました。協会の運営のための定期的な支出について、ラオ氏はインド人のビジネスマンから寄付を募るために、大阪や神戸などさまざまな場所を訪れました。

1978年、当時ラーマクリシュナ・ミッションの副会長を務めていたスワミー・ブーテージャーナンダは協会の招待に応じて来日しました。目的は、協会のメンバーに会うことと、霊性に関する講演を行うことでした。ブーテージャーナンダジはその後、さらに9回来日し、1984年にラーマクリシュナ・ミッションの認定支部の一つとしてこの民間団体が加盟する道を開いたのです。ミッションと提携するという

ことは、それ以降ラーマクリシュナ僧団の僧侶がその民間グループ/協会を担当し責任を負うことを意味し、そこからはミッションの支部と見なされず。この提携の後、スワミー・シッダールターナンダ(あなたのような年配のインド人はおそらくご存じでしょう)が初代会長としてセンターの責任者に就任しました。そこで彼は、ラーマクリシュナ・ミッションの瞑想、祈りなど、ミッションセンターの毎日のスケジュールを紹介しました。

一方、最初の家(マザー・ハウス)の近くにある協会の本館は、H. R. ガズリア氏と中井ハルさんからの寄付金で、徒歩約10分の場所に建てられました。中井さんは長い間最初の建物の居住者であり、翻訳や通訳を務めていました。さまざまな方法で協会を支援することに加えて、彼女は他の資金源からも寄付を得ました。

## ゴウタム

マハーラージ、ありがとうございます。協会の歴史を明確に詳しく説明してくださいました。そしてそれらはすべてスワミー・ヴィヴェーカーナンダの夢、最後の願いを叶えるためである、ということがよく分かりました。さて、日本ヴェーダーンタ協会が定期的に行っている活動について、読者に簡単に知らせていただけますか？

## マハーラージ

シッダールターナンダジーは当初から、日本語の知識がなければ日本で布教活動を行うのは難しいと考えて、日本語の学習に多くの時間とエネルギーを費やしました。実際、日本語学校に入学し、非常に良い成績を修めたので、ますます多くの信者が日本のさまざまな地域から訪れるようになりました。シッダールターナンダジーは日本語をかなりよく学びましたが、9年後、健康上の理由でインドに戻らなければならませんでした。病気のために日本での最後の数か月はあまり何もできませんでした。最終的にシッダールターナンダジーは1993年にインドに戻りました。シッダールターナンダジーはミッション本部の人々に、「もしも私の代わりのお坊さんが見つければ、彼のために私が日本を案内し、日本の信者に紹介します」と言いました。

さて、私自身について簡単に説明させてください。

私はラーマクリシュナ・ミッションが運営する学園の学校で三年間学び、その後、同学園の大学で三年間学びました。その大学はインドで最も有名な大学の一つでラーマクリシュナ・ミッション・ヴィディヤマンディールと言い、ベルル・マトに併設されています。この大学は全寮制男子校です。大学卒業後、1973年に同校の教師となり、1974年にはラーマクリシュナ僧団のブラフマチャーリ(見習い僧)になりました。

1980年に大学の校長に任命され、1993年までその責務を果たしました。そのような経緯から、私は学生や教師や教師以外のスタッフたちと親密な交流がありました。教育機関が主な活動の場でしたので、信者とは接触がありませんでした。しかし、1993年にラーマクリシュナ・ミッションの本部は私に、日本ヴェーダーンタ協会の長となるように任命しました。お分かりだと思いますが、日本とインドはさまざまな点で異なっています。ですので、日本在住の僧侶として日本に派遣されることは、私にとっては間違いなく大きなチャレンジでした。通常業務の性質も、男女を合わせた外国の信者と交流しなければならないという意味で、変わらざるを得ませんでした。

約束通りシッダールターナンダジーは私に付き添って日本で約三週間滞在した後、インドに戻りました。その後、私は一人取り残されましたが、日本についても、交流すべき信者についても、ほとんど知りませんでした。

さらにラーマクリシュナ・ミッションの当時の事務長が、過去8、9年間、日本のセンターはあまり成長をしなかった、という見解を知らせてきました。そして私にセンターの成長に注目するように、と指示を出しました。そのことから、もし私が日本語学習に時間を費やせば、他の重要なことがらがおろそかになり、協会の状態は現状のまま

で成長しないだろう、という結論に至りました。そこで私は最初からセンターの成長に焦点を当てました。もちろん、日本語会話を学び、日本人の信者と親密な関係を築くことも急を要することでした。そして、年月を重ねるにつれて、他の多くの活動も行われるようになりました。

次に、本協会の活動の概要についてご説明します。

まず、シュラインがあります。シュラインは、朝と夕方に信者と一緒に瞑想し、マントラを詠唱し、聖典を読む場所です。それだけでなく、早朝から夜遅くまで開いているので、誰でも入って瞑想することができます。また、毎月サットサンガを実施しています。(キリスト教会の日曜礼拝同様です) 私の前任者であるシッダールターナンダジーは、月に一度、全日のサットサンガを行うという伝統を始めましたが、この伝統は今でも続いています。そのスケジュールは、ヴェーダのマントラ詠唱、聖典朗誦、霊性に関する講義、質疑応答、ランチプラサード(神様のお下がりをいただく)、賛歌、で構成されています。またインド大使館においてバガヴァッド・ギーターの講義も毎月行っています。これらに加えて、日本のさまざまな地域の多くのグループを訪問して、その人たちのために霊性のプログラムを行います。実際、コロナウイルスのパンデミックが始まる前、

私はほぼ毎月これらのグループのもとに行っていました。ほとんどの場合、マントラ詠唱、霊的がテーマの講義、質疑応答、誘導瞑想の3時間のプログラムでした。数年間、私は東京(複数のグループが存在する)以外にも、大分、福岡、熊本、大阪、山形、仙台、札幌、今治、多治見、名古屋、浜松、沖縄など、日本各地の多様なグループを定期的に訪問し、ヴェーダーンタ、シュリー・ラーマクリシュナ、スワミー・ヴィヴェーカーナンダのメッセージを詳しく説明しました。また、信者のための夏季リトリートも開催しています。年に一度、ホテルや寺院のゲストハウスの部屋を借りて参加者が約2~3日間滞在し、夜明けから午後9時まで集中プログラムに参加することができる、というものです。夏季リトリートのプログラムには、瞑想、ヨーガ体操、観光、夜の集会などもあります。私達の目的は、自宅から離れて2~3日集中的にトレーニングを行い、理想の人生とは何か、どう生きるべきかを少しではありますが示すことです。

それに加えて、シュリー・ラーマクリシュナ、ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの生誕日を、儀式的な礼拝を含む特別なプログラムで祝っています。シュリー・ラーマクリシュナとスワミー・ヴィヴェーカーナンダは宗教の調和を信じていたので、

主イエスとお釈迦様の生誕日も祝います。これはラーマクリシュナ・ミッションのユニークな特徴で、同様の祝賀会は、インドと海外のラーマクリシュナ・ミッションのすべての支部で開催されています。また、私たちは個々の面談もします。というのは、人々は自分の心や霊性についての問題やその他のことについて私たちと話しをしたい、と望んでいるからです。彼らは自分自身の霊的、哲学的問題についても私達と話をしたいと思っています。

これらのこととは別に、協会は多数の出版物を出版しています。興味のある人に届けるには出版が不可欠ですので、日本語の出版物は約50冊にも及びます。インドの言語と英語以外の言語の出版物として、現在、日本語の出版物数は最大です。また、隔月刊の日本語雑誌も発行しています。

また、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの祝賀会も行っています。他の外国のセンターとは異なり、私たちはほとんど二か国語でやりとりをしていることは意義深いことです。協会のウェブサイトやコミュニケーション手段のほとんどが英語と日本語の二か国語であるため、興味のある外国人が私たちの活動を知り、参加することができます。

また毎朝、希望者には元気の出るメッセージを日本語で発信することで、こ

の国の人々に精神的、知的、霊的なサポートをしています。これら活動のおかげで、少なくとも 5 万人の日本人がシュリー・ラーマクリシュナとスワミー・ヴィヴェーカーナンダについてある程度の知識を得たり意識を持つようになりました。スワミージーのヨーガ・シリーズ [二] を研究しているグループもあります。たとえば、日本最大のヨーガ・グループの 1 つは、シラバスにスワミージーの 4 冊のヨーガ本を含めています。また、毎月、横浜の公園でホームレスのための福祉活動「ホームレス・ナーラーヤナ」を実施しています。ここでは食料品や古着を配っていますが、今年は東京のラチナ・クラブが古着を集めて協会に送ってくださったものを配布しています。また、2011 年の津波の際には、救援物資を被災者へ何度か送りました。このように財源不足と人手不足にもかかわらず、私達はこれらの社会奉仕にも象徴的に参加しています。インドではそのような慈善活動の範囲は広大ですが、明白な理由から海外ではあまりできません。協会には、読書と貸出ができる図書室もあります。

(次月号に続く)

[一] 木村日紀：日本ヴェーダーンタ協会初代会長 日蓮宗権大僧正、立正大学名誉教授、1931 年までインド・カルカッタ梵語大学講師。

[二] 『ラージャ・ヨーガ』『バクティ・ヨーガ』『カルマ・ヨーガ』『ギャーナ・ヨーガ』

## 忘れられない物語

### シビ王と鳩

昔、シビ王というたいへん親切で思いやりのある王がいた。ある日、シビ王が宮殿のテラスに座っていると、一羽の鳩がまっすぐに王のひざの上に飛んできて、震えながらうずくまった。「どうか私をお守りください！」と鳩は王に懇願した。「小鳩よ、恐れなくていい。お前を守ってやろう」と王は言った。

その時、鳩を追った鷹がやってきて王に言った「私の夕飯を返してくれ」  
王「おまえにこの鳩を食べさせるわけにはいかぬ。鳩に守ってやると約束したのだから」

鷹「それなら何を食えというのだ？ 私はものすごく腹が減っているので今すぐに食べないと死んでしまいそうだ。それに私の家族も飢えているのだぞ。もし私がこの鳩を家族に持って帰らなければ、家族も飢え死にってしまう」

王は鷹に、食べたいものを何でも申せと言ったが、鷹は「生肉しか食わん」と言って断った。

「では私の肉を食べなさい」と王が言



ったので、廷臣たちは驚いて叫んだ。王が「はかりを持ってきなさい」と命じ、巨大な天秤はかりがテラスの真ん中に運び込まれた。王は片方の皿にまだ恐怖で震えている鳩を乗せた。そしてシビ王は剣を取り、鳩と同じ重さになるように、自分の太ももから肉を切り取って、もう片方の皿に乗せ始めた。しかし、どれだけ肉を乗せても鳩と同じ重さにならない。それは非常に奇妙なことだった。

廷臣たちの嘆きや傷口の痛みがあっても、王は自分を切り刻み続けた。それでも鳩と同じ重さにならないので、ついには王自身がはかりに乗って鷹に「私を食べよ！ 鳩に危害を与えるでない！」と言い放った。

その瞬間、鷹と鳩は姿を変えた。鳩は火の神アグニとなり、鷹は神々の王インドラとなったのだ。

「我々はおまえがどれほど善良かを試そうとやってきた」とインドラは言った。「そして我々は十二分に満足した」インドラ神は王の傷を癒し、アグニ神とともに姿を消した。そこにいた者は皆、あつけにとられた。

## 今月の思想

心の平安の源は慈悲です。ほとんどの人は生まれるとすぐに、母親のお世話を受けます。それは私たちにとって最

初の慈悲のレッスンです。その慈悲がなければ私たちは助かりません。こうして人生が始まるのです。

…ダライ・ラマ

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: [info@vedanta.jp](mailto:info@vedanta.jp)